源氏物語を歩く

京都新聞社編

光風社書店版

検印省略　定価1200円

源氏物語を歩く

昭和四十八年九月十五日　印刷
昭和四十八年十月　五日　発行

編　者　京都新聞社
発行者　豊　島　　澂
印刷者　菅　生　定　祥

発行所　株式会社光風社書店
東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話東京(291)〇二三八・二五〇七
振替東京　一二九一三番

0025—075001—2265

源氏物語と私

湯川秀樹

私が小学生だったころ、女学校を卒業して国語漢文専攻科に通っていた姉が、家に帰るとノートを整理し清書していた。のぞいてみると、きれいな字で、緑色のインキと茶色のインキを使って書きわけられていた。源氏物語の講義のノートだと聞かされた私は、それは女だけの世界の話で、男の児には何の関係もないと思った。ずっと後になって、あの難解な原文を、よくわからぬままに、とにかく読んでみることにした。なかなかなじみにくいのを辛抱して読み進んでゆくうちに、いつしか私の心は、この物語のつくりだす一種不思議なふん囲気の中に、すっかり包みこまれていた。一度こういう経験をしたあとは、何年たってもこのふん囲気が消えてしまうことはなかった。今もなお、ほのかな、しかし他にくらべようのない香気を、心の片隅にただよわせ続けている。この物語が世に出てから千年近い長い年月の間に、非常に多くの人が、こういう経験をしてきたに違いな

い。

しかし、所せんそれは虚構の世界だと割り切ってしまえば、この物語の巻々に登場する人物のモデルをせんさくしたり、彼らの活動する舞台と、洛中洛外の特定の地点とを対応させたりすることなど、全くどうでもよいことになる。そういう先入観をもっていたせいか、「源氏物語を歩く」が連載されだしてから、最初しばらくは、私の注意をひかなかった。

ところが四、五回目ごろから気がついて読みだしてみるうちに、だんだん面白く思うようになってきた。それというのも、満一歳から今日にいたるまでの六十年あまりの大半を、私は同じ京都の町なかでも、紫式部にゆかりの深い地域で暮らしてきたことを、改めて感じさせられたからである。

いま住んでいる家は、下鴨神社に近く、葵祭のころなど、自然と平安の昔がしのばれる。幼年期から青年期にかけて、御所の東側、あるいは北側の家々を転々としていたが、中でも小学生時代は、寺町通を広小路から染殿町の京極校まで、毎日通っていた。数年前に、この通路に面した廬山寺が、紫式部の住居の跡として公開されるようになってから、そこを訪れて

紫のゆかりは知らず寺多き
道ゆきかひし少年の日々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

という腰折れを作ったりしたが、それこそ

「ややもせば腰はなれぬばかり折れかかりたる歌をよみいで、えも言はぬよしばみ事しても、われがしこに思ひたる人、にくくもいとほしくも覚え侍るわざなり」

と、彼女に笑われる種をつくっただけかも知れない。

「源氏物語を歩く」を読んで、こんなことまで原作に書いてあったのかと、何度か驚かされた。

たとえば「乙女」（あるいは「少女」）の巻には、夕霧の大学入学や試験の話があることを教えられて、本文を読みかえしてみると、当時の貴族にとっての学問とは何であったか、ある程度わかって面白かった。漢学に大いに自信のあった彼女は、ここで、ちょっと「学問論」をしてみたくなったのだろう。貴族だけの世界の話といっても、博士たちと上級貴族の子弟たちとの間には意識や生活に大きな隔たりがある。彼女の戯画的な描写は、双方に対する辛辣（しんらつ）な批評になっている。源氏物語は、全体としてほのかな香気をかもしだしていると同時に、ところどころ、わさびのよくきいた美味でもあったわけである。（昭和四五・九・一六）

目

次

桐壺　愛宕珍皇寺　三
帚木　淑景舎　七
空蟬　二条院趾　一一
夕顔　夕顔の宿　一五
若紫　岩倉大雲寺　二〇
末摘花　朱雀院跡　二四
紅葉賀　三条宮趾　二八
花宴　弘徽殿跡　三三
葵　一条戻橋　三六
賢木　紫野雲林院　四〇
花散里　中川の宿　四四
須磨　須磨海浜公園　四八
明石　明石　五三
澪標　住吉大社　五八

蓬生　紙屋川　六三
關屋　逢坂山　六七
繪合　嵯峨清涼寺　七一
松風　桂離宮付近　七五
薄雲　亀山公園　八〇
朝顔　桃園宮跡　八四
乙女　大学寮跡　八九
玉鬘　長谷寺　九三
初音　醍醐寺　九八
胡蝶　河原院跡　一〇二
螢　玉鬘邸　一〇七
常夏　妙法寺跡　一一三
篝火　椿市　一一七
野分　東三条殿跡　一二一

行幸　小塩山　一三六
藤袴　大原野神社　一三〇
眞木柱　石山寺　一三五
梅枝　羅城門跡　一四〇
藤裏葉　宝塔寺　一四五
若菜（上）　仁和寺　一五〇
若菜（下）　石清水　一五五
柏木　宇治陵　一六〇
横笛　岩戸落葉神社　一六五
鈴蟲　冷泉院跡　一七〇
夕霧　大原三千院　一七五
御法　鳥辺野　一八〇
幻　賀茂御祖神社　一八五
匂宮　大覚寺　一九〇

紅梅　春日大社　一九五
竹河　大極殿跡　二〇〇
橋姫　橋姫神社　二〇五
椎本　平等院　二〇九
總角　許波多神社　二一四
早蕨　宇治上神社　二一九
宿木　音無の滝　二二四
東屋　法性寺　二二九
浮舟　塔ノ島　二三四
蜻蛉　宇治川　二三九
手習　小野　二四四
夢浮橋　横川　二四九
補遺紫式部の跡　二五四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〈付録〉

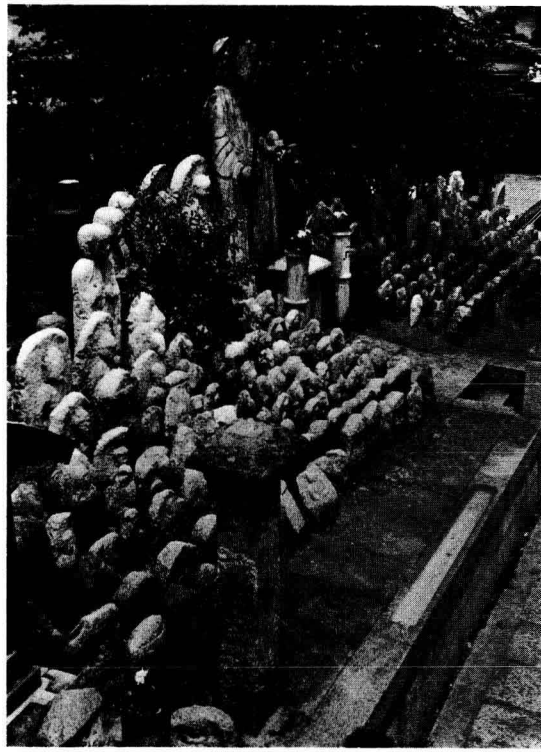
源氏物語系図　二六一
平安京図　二六三
源氏物語年譜　二六六
あとがき　二七九

装幀　佐多芳郎

源氏物語を歩く

桐壺

巻名は文中の「御つぼねは桐壺なり」からとられた。桐壺は内裏の淑景舎で、庭に桐が植えられていたので、こう呼んだ。同巻はまた「壺前栽」「輝く日の宮」との別名がある。



愛宕珍皇寺　遠い時代を抱きしめた珍皇寺境内

限りあれば、例の作法にをさめたてまつるを、母北の方、

「おなじ煙にも、のぼりなむ」

と、泣きこがれ給ひて、御送りの女房の車に慕ひ乗りたまひて、愛宕という所に、いといかめしうその作法したるに、おはしつきたる心地、いかばかりかはありけん。空しき御骸を見る〳〵、

「なほ、『おはするもの』と思ふが、いとかひなければ、灰になり給はむを見たてまつりて『今は、なき人』と、ひたぶるに思ひなりなむ」

と、さかしうのたまひつれど、車より落ちぬべう惑ひ給へば、

「さは、思ひつかし」

と、人〳〵もて煩ひ聞ゆ。内より御使あり、三位の位おくり給ふよし、勅使來て、その宣命讀むなん、悲しきことなりける……。

そこは、かさかさで、すべてがいまにもくずれそうに、しかし必死にこらえているというふうだった。だだっ広い間口の薬師堂も、歳月に表情をけずり取られたお地蔵さんたち、白壁にかこまれた鐘つき堂も。そして乾いた風だけが、その孤独な姿をあっけらかんと吹き抜けていく。

限りとて別るゝ道のかなしきにいかまほしきは命なりけり

（いまを最後と別れていく悲しい死への旅路の時にあたって、生きたいのはこの命です。死ぬことが前からわかっていたのなら、色々と申し上げておく事もあったのに）

小さな生を抱きしめながら、なくなった桐壺更衣の葬儀が続いた寺というには、あまりにさめた、透明な境内を開いているのである。寺を情念の宿所、と定めたのはいったいだれなのか。ここでは、わずかの影をむさぼってあちこちに駐車した、汗くさい自動車は似合わない。

表通りから、ときおり店屋さんの売り声がなにかに〝カーン〟とはねかえるように響いてくる。

桐壺の更衣の葬儀が長い列にひかれて営まれたのも、やはり夏であった。

「いづれの御時」帝の寵愛を一手に集めた桐壺更衣。とりたてて高貴な家柄ではなかったが、その容姿、ひかえた立ち居ふるまいが、深く帝の心をとらえたのだろう。

二人の間にはいつしか「世になく清らなる」こどもが生まれた。光源氏である。帝の、更衣への愛はさらに傾いた。なにかにつけてもおそばにお召しになる。「さるべき御遊びの折〳〵」に、「故ある、事のふし〴〵」に。

ときには、更衣と寝過ごし、そのまま無理に引きとめ一緒に過ごすこともあった。ほかの気位の高い更衣たちの桐壺更衣への嫉妬はそうでなくても強かったのだが、源氏誕生後ははげしさもつのる一方。第一皇子の母弘徽殿の女御の疑念はことにはげしかった。

「もしかしたら皇太子の位置をわが子でなく、この女の、子に奪われるのでは……」

源氏が三歳を迎えた夏だった。もともと丈夫なからだでなかったうえに、嫉妬に燃える更衣たちの陰湿なはかり事が続いたためか、桐壺更衣は消え入るようにはてた。

帝の悲しみはほかでもない。追福法事ばかりか、夜空にかかった細い夕月を見るにつけ、管弦の遊びのなかで琴の音を、ふと耳にするにつけ、彼女の姿を思い起こすのだった。それは「闇のうつゝ」にも劣るほどはかないものであったけれども……。

そんな帝のもとにある日、藤壺の女御が入内(じゅだい)した。彼女は死んだ桐壺更衣と見まがうほどよく似ていた。帝の心の傷もいやされた。内裏ではこの藤壺を「輝く日の宮」と呼んだ。源氏は「光る君」と呼ばれた。そして源氏は、あまりに母に生き写しの義母「輝く日の宮」にエディプス・コンプレックスにもにた感情を抱くのだった。十二歳の元服の夜、葵の上を妻にしたのだが、藤壺への恋慕は断ち切れなかった——。

桐壺更衣への帝の寵愛、更衣の他界、源氏の藤壺への愛……。この巻には実に多くの事件が織りなされている。そしてそこに、これから展開していく源氏の、外的には花やかな恋愛の耽溺(たんでき)の底に沈んだ暗い陰影がねばっこくまとわりついた宿命の本然を見ることができるのである。

愛宕珍皇寺。〝六道さん〟とも呼んで親しまれる、京都でももっとも古い寺だ。開祖は弘法大師の師慶俊僧都。小野篁(たかむら)建立の説もある。篁は歌人で平安京の参議。伝説によれば、昼は朝廷に出、夜はアルバイトで閻魔(えんま)庁につとめた。

〈六道の辻とかや、げに恐ろしやこの道は冥土に通ふものなるを……

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com